

法然、老境期の伝道

——謎の三福寺——

森 谷 峰 雄

〔抄 録〕

法然は、讃岐滞留に三つの福という名のつく寺—清福寺、真福寺、生福寺—を使って伝道したという謂れがある。しかも、夫々の間隔は、数百メートルであるので、拡声機もない当時に、これらの寺を同時に使用したとは、考え難く、又、時間を別にして、使用したとしても、近隣の故に、それほど必要性はなかったと思われる。それでは、なぜ法然はこれら三福寺にかかわったのか、という疑問に出会う。それで、謎の三福寺とタイトルにしたのである。それは、法然がこれらの寺を建立したのではなく、当時すでに三福寺は建立されていて、それを法然が伝道に使用した、と考える。

キーワード 法然、三福寺、清福寺、真福寺、生福寺

筆者は、讃岐に逗留された時の法然の伝道の意味を、この小文において論じる。先にお断わりをしておきたいが、この小文は宗派の職業的専門的立場に立つのではなくて、讃岐における、法然の伝道の地に生まれ育った者の素朴な観察である。結論を先に言えば、彼の讃岐の伝道は、一般民衆の生活規範として一大勢力へと向かったのではなく、民間信仰へと帰結したものと思われる。その最大の証拠は、法然が活動したであろう土地の人々の人間性が、今において非常に善良であることである。その二は、讃岐各地に伝わる法然に纏わる伝説である。結局、法然が蒔いた信心の種は、言うまでもなく、浄土宗宗派の寺の宗教的活動は別として、土着信仰として、今なお、根強く生き続けているところに意味がある。その伝道の基地となった三福寺は、彼の建立になるのではなく、当時、既存であった、とするのが本論の意見である。

讃岐における法然の伝道の中心地は、生福寺である。ここを中心にして、法然は、伝道活動された。その時の活動振りは次のように報告されている。

讃岐国子松庄におちつき給にけり。当庄の内生福寺といふ寺に住して、無常のことはりをと、念仏の行をすゝめ給ければ、当国近国の男女貴賤、化導に従ふもの市のごとし。或は自力難業の執情をすてゝ、念仏に帰し往生をとぐるものおほかりけり。辺土の利益を

おもへば、朝恩なりとよろこび給けるも、まことにことほりにぞおぼえ侍る。⁽¹⁾

子松庄というのは、今のまんのう町を含む香川県仲多度郡一帯である。ここは、当時、関白九條兼実の所領地であった。ここにある生福寺を拠点にして、法然は、伝道をされたのである。この地方は今尚条里制や弘安寺の跡が残る由緒ある地方なのである。

京都を旧暦3月16日（新暦5月2日）⁽²⁾に出発され、3月26日（新暦5月12日）に、讃岐国塩飽の笠島に着き、丸亀、宇多津、坂出、金蔵寺、善通寺、そして宮田を経て、この地に到着したのが、具体的な日付は不明であるが、ある筋では初夏とある。⁽³⁾法然が子松庄に着かれたのは、新暦5月中旬から下旬位であろうか。（旧暦では、4月中旬から下旬であろう。ここでは、以下、紛らわしいので、旧暦を中心にする。）専称寺の説明文には、塩飽に数ヶ月滞在されたとある。

上人は島に居られること数ヶ月で讃岐小松荘に移ることになりました。⁽³⁾

とある。同じ塩飽にあるもう一つの寺によると、

本島にしばらく滞在された上人は、やがて讃岐の小松荘の正福寺（今の西念寺）^(註)へうつられました……⁽⁴⁾

とある。この中では彼の滞在を「しばらく」としか明記されていない。ある学者によると、法然の塩飽滞在は1ヶ月か2ヶ月であるとする。⁽⁵⁾この滞在期間について、少し考えてみよう。法然は8月21日武蔵国の津戸三郎に見舞いの返信を認めている。この時は法然は小松荘にいることは疑うことのできない事実である。そして、この間の消息を上人絵伝は次のように伝えている。

七月十四日の御消息、八月廿一日見候ぬ。はるかのかかひにかやうに仰られて候御ころざし、申つくすべからず。まことにしかるべき事にて、かように候。とかく申ばかりなく候、但し今生の事はこれにつけても、われも人もおもひしるべき事に候。いとひてもいとむと思食べく候。けふあすともしり候はぬ身に、かゝるめを見候、心うき事にて候へども、さればこそ穢土のならひにては候へ。たゞ、とく／＼往生をせばやとこそ思候へ。たれもこれを遺恨の事などはゆめにも思食べからず候。しかるべき身の宿報と申、又穢悪充滿のかかひこれにはじめぬ事にて候へば、なに事につけてもたゞいそぎ／＼往生をしてむと思べきことに候云々。⁽⁶⁾

上の消息文、特に、最初の文「七月十四日の御消息、八月廿一日見候ぬ」はその呼吸の置き

かた即ち文のリズム：「御消息」の三単位リズムの繰り返し：「見候ぬ」から勘案すると、法然上人の心の状態には沈着性がある、と見られる。三単位リズムは二単位リズムの活動性とは対照的に循環性を表現するからである。少なくとも、法然は当地において落ち着いていることが分かる。2乃至3ヶ月位の逗留から来る心境であろう。ここでは、仮に3ヶ月とする。それは、その数字は人間の周期性を表すからである。常に死を覚悟し、悟った宗教者といえども、環境によって、その生活感情に起伏があって然るべきであるからである。



法然上人松山観桜の図—弘願本—⁽⁸⁾

即ち、彼が子松荘に着いたのは、逆算すると、5月下旬頃に、当地に到着したのであろう。塩飽に滞在したのは、3月26日から4月下旬頃であろう。それは、彼がここに来るまで、丸亀、宇多津、坂出、等々を訪ね歩く日数に約1ヶ月位を必要としたであろうからである。塩飽から子松荘に来るまでに、長くて一ヶ月かけたとすれば、塩飽を出たのは、4月下旬あたりではなかろうか。この計算によれば、法然上人塩飽滞在は1ヶ月位となる。同年12月8日(新暦1月26日)赦免の院宣が下り、その使者が到着するまでの約8ヶ月、この地を中心にして、仏法を説かれた。

今、この文章を書いている筆者は普通寺の実家にいる。ここから、歩いて、40分くらいのところで、今から約800年前に法然が、説教している姿を想像すると、今が昔のように思われてくる。歴史の進展は、人に時代の文明化に拘わらず人の道を示す。法然は、丸亀、宇多津、坂出、そして、金蔵寺、普通寺、宮田を廻られて、生福寺に着かれた。少しタイムスリップして、800年前の讃岐普通寺に生きてみよう。

さて、一人の立派な体格と威厳ある僧と、7人の連れらしい者と馬三頭が、宮田から象頭山の麓、まんのう町のとある寺に向かわんとしている。⁽⁷⁾その寺こそ法然の説教の拠点であった。京を出発して4ヶ月が過ぎようとしていた。その間に4月5日、法然は、自分を慕う九条兼実を死を恐らく塩飽か丸亀逗留中に聞き、悲しみの涙を流したであろう。(唯、馬が三頭もいたかどうかは不明である。小さい屋形船に馬が乗っている絵はない。唯、本島の専称寺の絵伝では、確かに馬の絵があるが、これは、高橋保遠入道西忍の馬かもしれない。法然は、讃岐でも輿に乗っていたのであろう。それは、法然上人松山観桜の図—弘願本—に、輿が配置されていることから分かる。唯いつも、輿に乗っている訳でもあるまい。)

そして、今、生福寺で説教の最中である。讃岐での法然の活動の中心地は子松荘の生福寺であった。ところで、この生福寺の所在が問題である。今ある西念寺がその名を誇っているが、実はその候補となる寺が他に一つある。それは今の円浄寺である。当時お寺といえ、もちろん

ん、浄土宗の寺はない。あるのは、天台宗、時宗、或は真言宗の寺くらいであろう。しかし、問題はもっとある。それは、三福寺といわれる生福寺以外に、他の二つの寺—真福寺と清福寺—の存在である。なぜ、法然に纏わる寺がこの僅かに約500メートル四方の地域に四つもあるのだろうか。



図は、近兼和雄編集刊行『円光大師法然上人—さぬき・まんのうの足跡—』(満濃町文化財保護協会、2001年7月)、7頁より転写。

謎の三福寺

筆者が小松荘今のまんのう町に来て、地元の人々や地元の寺院やゆかりの地を訪れて、不思議に思ったのは、三福寺の存在である。それらの名前は、生福寺、真福寺、及び、清福寺である。それについては、精密な研究がある。それは、地元法然史跡研究家近兼和雄氏の『円光大師法然上人一さぬき・まんのうの足跡』である。法然の居所としては、生福寺であった。法然という一大宗教者が宿泊すべき、その他の然るべき大寺院が近くにあったのに、なぜ又誰が生福寺を選んだのか。又、当時、真福寺はあったであろう。しかし、清福寺はあったのか。清福寺は、法然のために特別に造営されたのか。或は、既に寺として存在していたのか。約500メートルの近距離に四つのお寺（円浄寺も入れて）が存在する理由は何か。それは、法然の活動の結果であるのか。此処から、筆者は法然の伝道の意義について、この研究を参考に筆者の考えを述べる。

一つの仮定は次のようである。法然が到着した時、彼のゆかりのお寺は生福寺である。しかし、ややこしいことに、生福寺は二つある—この問題は後に解く。そして法然の説教の活動によりて、新たに二寺が法然のために作られた。厳密には、一寺は、既存であったが、それを再興した。他は新たに造営された。一見、この説を採るような文献があり、次のように記されている。

真福寺 寺伝によると空海の開基という。建永2年(1207)讃岐に流された法然が、小松庄で八カ月間専修念仏の教えを説き、その由縁によって生福・清福・真福の三福寺が建立され、浄土宗の念仏道場として繁栄した。⁽⁹⁾

しかし、上記の記述はおかしい。それは、「その由縁によって生福・清福・真福の三福寺が建立され」と言う箇所である。それはまるで、これらの三寺が法然のために建立されたような言い方である。つまり、法然が当地に到着する以前にはこれらの寺はなかったと言う意味である。もちろん、そうではない。生福寺は既に存在していたからこそ法然はここに起居できたのである。それに、当時、この地方にはもちろん大きなお寺は、善通寺を初めとして、弘安寺、円浄寺、或は、現在発掘中の見合奥の山中の中寺等々があった。歴史を遡ると、10世紀頃、讃岐地方は仏教寺院が多く建立されていたという。法然の頃にも、仲南村には、尾ノ瀬という寺院があったという。⁽¹⁰⁾満濃町一帯も特にそれが顕著で、このあたりには、寺院にまつわる地名が多いという。その中で今注目されているのが、琴南町発掘中の中寺廃寺である。とまれ、辺境の山岳地帯にも、人々の救済を求める信仰心があったのは、感動的である。

しかし、法然到着時で、法然ゆかりの寺は先に上げた四寺しかない。問題は、この二寺、清福寺と真福寺が、法然到着以前にあったのか、法然の到着後にできたのかである。『香川県の

地名』では、後者の説を取る。しかし、両寺真福寺と清福寺は、まるで隣り合わせであるので、取り急ぎの建立のようである。真福寺の方は、空海の開基であるから、既存寺であったろう。それを法然が伝道用に用いたと思われる。その寺から200メートルしか離れていない清福寺はどうだろう。これは、真福寺の延長用に急きょ造営されたのかも知れない。それは、小さい草庵のような所であったであろう。なぜならば、わずかの期間恐らく長くて30日、短くて15日位で建設できるもので、それとて、近くには大きな寺院を建設することができる人物はいなかったからである。なぜ、こんなに近い所に2つも寺があるのかその理由を考えるのは難しいが、やはり、先に建てた草庵に何か不足したものがあつたからであろう。以上の仮説は何か釈然としない。それは、寺の名前である。三福寺一生福寺、清福寺、真福寺—は何か一定の思想の元に建立されたことを思わせるからである。もし、法然が建立したならば、其の名を自分で付けたであろう。法然がわざわざ、清福寺と名づけること自体何かのもそぐわないものを感じる。絵伝には、法然が寺を建立した話はない。寺の建立は大きい仕事であるので、もし、事実であれば、そう記録したであろう。そうでないとすると、後世の人が名づけたのかも知れない。しかし、既に、二寺の存在は明らかであるので、この一寺のみないと言うのは腑に落ちない。結局、三寺とも、当時既存の寺であつたと推論するしかない。

そこで、三福と言う概念が問題となってくる。法然以前の人々が、三福という思想で、三つの寺を建立していたのではないか。そこで、筆者は「三福」という概念が真言宗にないか、と善通寺の学芸部に問い合わせたが、不明と言う。いくつかの佛教辞典には、その言葉は出ている。例えば、

サンプク 三福 三種の福業の意。極楽往生の行因に三種の浄業あるを云ふ。一に世福、二に戒福、三に行福なり。観無量壽經に「彼の国に生ぜんと欲する者は當に三福を修すべし。一には父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二には三帰を受持し、衆戒を具足して威儀を犯ぜず。三には菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此の如きの三事を名づけて浄業となす。⁽¹¹⁾

つまり、極楽往生、天国に生まれようと願う者の心得が三福である。当時、このように「彼の国」に生まれ願う多くの人々対して、現代の我々は莊重な敬意を払わざるを得ない。

これらの三寺は、上のような佛教の教えに沿って、当時の人々が建立していたのであろう。そう考えると、すべてが整合される。筆者はこの考えを採る。つまり、三福寺は、既に建立されていて、それを法然が活用したので、栄えたと言うのが史実ではないか。この問題が生じるのは、清福寺に、「由緒」がないからである、少なくとも、筆者が入手した資料に関して言えば。なぜ、この寺のみ由緒がないのかが疑問として残る。そのことと、その他の二寺について言えば、江戸時代の権力者によって、庇護を受けている。藩主松平頼重公は、生福寺を寛文8

年(1668)、子松荘から高松市に移転して、名前を変えて法然寺とし、延宝年間に真福寺を現在のまんのう岸上に移して、今栄えている。しかし、この清福寺は現在、村民によって、集会所とされているに過ぎない。この事実と寺の由緒の有無と関係があるように思えるが、この問題はここまでにする。

さて、もう一つの問題に移ろう。法然が最初に宿泊した生福寺には、2つの候補がある。ひとつは、今の円浄寺(旧名正福寺)、他は今の西念寺(旧名生福寺)である。円浄寺は広い境内を誇り、法然を迎えるのにふさわしい。では、どちらが本当の法然の泊まれた寺であるかを決めるのは、困難である。両者とも、清福寺から約500メートルの距離で、西念寺は清福寺から北東の方向で、途中に土器川を挟む。円浄寺は、北西の方向である。ある説によれば—これは、近兼和雄氏の話として聞いたものである—、法然は、先ず、円浄寺に入り—この寺も正福寺と呼ばれていた、尤も漢字が「生」ではなかったが—休憩などして、土器川を越えて、今の西念寺にあった、生福寺に赴かれた。そう考えると、円浄寺も法然と無縁の寺ではない。事実、この円浄寺について、次の説明がある。

円浄寺 土器川の左〔西〕にある。仲津山白紫院と号し、真宗興正派。寺記によると、かつては白紫山中之坊仲津山生福寺で、建永二年(1207)讃岐に流された法然がこの寺に止錫して念仏を広め浄土宗寺院になった。⁽¹²⁾

更に、仲多度郡史から圓浄寺の資料を見る。

圓 浄 寺 高篠村大字東高篠字本村

本寺は、村の中央部、中分の地にあり。中津山白紫院と称す。…當寺は寺院明細帳に「往古菅原道眞公の建立、白紫院、中ノ坊、仲山(仲津山か)正福寺と申来り、眞宗、天台、禪宗、浄土と転宗。大永年中より沙門了専、一向宗圓浄寺と改めたり。天正年中、長曾我部元親當國に亂入の際、當寺に屯す。此の時堂宇什寶盡く兵火に焼失す」云々とあり。又當寺の旧記に「世亂、數回興廢、民家易地、名藍廢址所以者乎云々。或曰源空上人始萬此寺云々とあり。以下略。⁽¹³⁾

この寺を、法然上人が再興した、とも言う。

法然は、当時の生福寺が2つもあるとは知らなかったであろう。筆者が、今の西念寺にあって、生福寺に法然の主要な伝道拠点とするのに、躊躇をしていたのは、この寺に由緒が欠けて、その信憑性を疑っていたからである。しかし、この寺が「空海建立」^(註5)とする説を見出して、この寺が、絵伝に登場する寺であると、考えるようになった。境内の大きさはともかく、霧圀

気が当時を忍ばせ、今だに奥ゆかしい。

法然にとって、なぜ真福寺や清福寺が必要なのだろうか。善通寺方面から生福寺に行くには、土器川がある。もし、洪水で橋が流失されれば、行き来ができなくなる。その非常用として、二寺を必要とされたのか。それにしても、一寺でなく二寺はどうしているのか。既にあったから理由は特にないと考えてもよいのか。あるいは、聞きに来る人が多すぎて、この二寺を利用したのか、講義室とか聴衆者の便宜のために、利用されたと考えてもよい。法然は、この生福寺を起居の場として、そして、そこを伝道の活動の中心として、周囲に説法を広められ、そのサテライト基地として、真福寺と清福寺を活用されたのであろう。法然の恩徳にあやかって建立された寺はある。たとえば、土佐の正福寺はこの類の寺である。しかし、子松荘の場合はそうではない。これが、いわゆる三福寺の姿であったであろう。

清福寺が語るもの

以上のように考えると、清福寺の資料に書かれてある困惑する内容も、問題ではなくなろう。それは、清福寺も生福寺もあったと言う。

清 福 寺 址 四 條 村

宇天皇の地にあり。生福寺、真福寺と共に法然上人の旧蹟、子松三福寺の一たりしか、夙に衰頹して今僅かに小庵を止めて其の跡を存するのみ。⁽¹⁴⁾

筆者が特に注目したいのは、実はこの清福寺址なのである。2011年3月19日、筆者は、地元の研究者近兼氏に案内されて、三福寺を視察した。生福寺は、高松の仏生山に移転されて、今は、浄土宗の法然院として、又、真福寺は後に、ほど近い山辺に移されて、これも浄土宗の寺院として今栄えている。しかし、清福寺のみは、どこにも移転されないで、そのまま残った。



東高篠の法然堂の内部



東高篠の法然堂の美しい夕景遠景は象頭山(左)と我拝師山

そして、今は、集会堂が建てられ、法然を祭っている。法然を祭るといえば、近くの川のほとりにも、法然が祭られている。それは、近隣の人々の信仰の対象として、今、残っているのである。職業的な僧侶によるのではなく、一般の他の職業を持ちながら、法然が灯した灯火を今だに絶やさずに守っているところが、筆者の心を捕らえたのである。讃岐に残る多くの法然に纏わる伝承が実は、彼の偉大さを物語る。

讃岐に残された法然の伝承は多い。近兼氏の調査によれば、⁽¹⁵⁾法然上人ご遺跡は32点ある。その内、現在も寺の機能をしているのは、12で約4割でしかない。民間伝承として、讃岐の法然は知られていると言ってよいであろう。筆者が幼い頃知った法然は、この場合である。即ち、所謂職業的宗教としてみた場合、法然の活動は限られていたと見るべきであろう。その原因は多々あろうが、その最大の原因は8ヶ月という滞在の時間の短さ、老齡、流罪の身分等々から来る活動制限であろう。しかしそれは、非本質的観察である。寺院の数より民間伝承・遺跡のそれが多いのは、法然宗教の特質を表す。

最近の香川県の宗教法人の統計を見ると、⁽¹⁶⁾宗教法人数は次のようになる。

天台宗関係：	24	
真言宗関係：	320	
浄土宗関係：	28	
真宗関係：	420	(その他省略)

全香川910宗教法人の中の、3パーセントを浄土宗が占めている。この原因は多々あると思われる、直ちに法然の讃岐流罪に関係するものではないと考えられる。例えば、浄土宗が江戸時代に時の政府権力の庇護が厚かったので、布教活動に積極的ではなかったとよく言われる。一般的に言えることは、香川において、法然の教えは正にこの数字が示す通りで、此の解釈は読者に委ねる。それでは、法然の夢はどうなったのであろうか。流罪の院宣の下ったときの彼の意気込みは次のように示されている：

流刑さらにうらみとすべからず、そのゆへは齡すでに八旬にせまりぬ。たとひ師弟おなじみやこに住すとも、娑婆の離別ちかきにあるべし。たとひ山海をへだつとも、浄土の再会なむぞうたがはん。又いとふといへども存するは人の身なり。おしむといへども死するは人のいのちなり。なんぞかならずしもところによらんや。しかのみならず念仏の興行、洛陽にしてとしひさし、辺鄙におもむきて、田夫野人をすゝめん事季来の本意なり。しかれども時いたらずして、素意いまだはたさず。いま事の縁によりて、季来の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいふべし。この法の弘通は、人はとゞめむとすとも、法さらにとゞまるべからず。諸仏濟度のちかひふかく、冥衆護持の約ねんごろなり。しかればなんぞ世

間の機嫌をはぐかりて経尺の素意をかくすべきや。たゞし、いたむところは源空が興する浄土の法門は、濁世末代の衆生の決定出離の要道なるがゆへに、常随守護の神祇冥道さだめて無道の障難をとがめ給はむか、命あらむともがら因果のむなしからざる事をおもひあはすべし。因縁つきずば、なんぞ又今生の再会なからむや⁽¹⁷⁾

上の文中、特に次の言葉「しかのみならず念仏の興行、洛陽にしてとしひさし、辺鄙におもむきて、田夫野人をすゝめん季来の本意なり。しかれども、時いたらずして、素意いまだはたさず。いま事の縁によりて、季来の本意をとげん事、すこぶる朝恩ともいふべし。」は注目に値する。法然は、都人だけでなく、田舎の「田夫野人」を教化したいと思っていたのである。彼が実際讃岐の生福寺で説法した対象は次のように記されている。

讃岐国子松庄におちつき給にけり。当庄の内生福寺といふ寺に住して、無常のことはりをとき、念仏の行をすゝめ給ければ、当国近国の男女貴賤、化導にしたがふもの市のごとし。或は邪見放逸の事業をあらため、或は自力難行の執情をすてゝ、念仏に帰し往生をとぐるものおほかりけり。辺土の利益をおもへば、朝恩なりとよるこび給けるも、まことにことほりにぞおぼえ侍る。⁽¹⁸⁾

上の文章からは、彼の元にお大勢の人々が、身分はあらゆる階級にわたり、行いの悪い者もそれを改め、宗教的に熱心ないわゆる玄人の僧侶も、その自力本願から他力本願へと改めた。絵伝を見ると、老若男女、武士も僧侶も、市をなすように生福寺に集まって、法然の説法を聴聞している。ここを見ると、彼の希望は叶えられたように思える。



上人子松生福寺に住す。

（『勅修御傳縁起』（東光社発行、明治四十四年三月一日、復刻平成6年十月一日、浄土宗正観寺発行）、540頁から複写）



清福寺跡の集会所



集会所の外の夕焼けの美しい集会所外の景色。
象頭山(左)と我拝師山(右隣)

しかし、より興味深い事実は、後世において、この彼の志が遂げられたと言えるのは、職業的僧侶ではなく、民間の人々即ち「田夫野人」においてである、と思われることである。法然の説法を聴聞した僧侶達が奮発して大いに活動を行った形跡は見られない。即ち、後に浄土宗として発展したお寺の数が少ないのである。それとは対照的に、彼の影響は、無学と言える一般民衆によって、法然の遺徳が多く場所で継承されている。無学であるが故に、疑うことが少ない。それ故に、法然の教えが、最も熱心に継承されたのであろう。これは、皮肉な現象といわざるを得ない。正に、法然の標語：「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」が生きているようだ。その最も明らかなものが、清福寺跡の集会所における月一度の法会であろう。

そして、この延長上に讃岐各地に今でも生きている民間伝承である。例えば、その典型的一例として、「史跡法然上人御経塚由来」に記されている。全文を引用する。

「法然上人の御経塚が永年わが郷土にありながら」、その由来も広く知られず、訪れる者も少なく、一部篤信の方々のうろわしき奉仕によってのみ守られてきた。このたび有志相計り、地元部落はもとより、広く各方面の賛同を得て、今回深き由縁の地に御堂を造り、上人の遺徳をしのび、併せてその由来を書き記し、後世に伝えんとするものである。

法然上人は美作の人で、十三歳の時、比叡山に登り、経論中「一心専念阿弥陀名号」の文章から、大いに悟るところがあって、安元元年高倉天皇の時代、四十三歳で浄土宗を始め、時の関白藤原兼実の信仰を得ていたが、たまたま門弟たちが念仏会を開いたことから罪を得て、上人は土佐に流されることになった。しかし、藤原兼実の力によって、讃岐の塩飽島に流されることとなったのである。これは塩飽島が兼実の所領であったゆえである。上人は承元元年三月二十六日塩飽本島にお着きになり地頭高階保遠の館にお預けの身とされた。それから上人は仲多度郡に渡って、兼実の所領である小松の荘を中心として浄土教をお勧めになられたのである。すなわち高篠村の生福寺はその本拠地であった。

法然上人はわが讃岐にお渡りになられてからも、常に民衆の中であって、仏の教えを諭し、

その迷えるを開き、困る者を助け、災いを取り除き、あやまちを改めさせるなど、もっぱら民の啓発に努められ、その御事績は余りに数多く、全部をつくすことは不可能なので、この地に起これる一、二の事例を、昔よりの言い伝えにより記せば次のようである。

ある時上人、滝宮へ下向の折、里人はこの里にお迎え申しあげた。それは当時藤原岡の塚（現在藤重本家お守りする）より宙に迷う女人口より火を吹き、音を立てて、宮池付近より北挿頭山の牛岩馬岩のあたりまで飛び回り、ものすごく恐ろし。里人こぞって上人に御済度をお願いしたのである。そこで上人、部落の者に、川より小石を集めさせ、それに三部経二万六千字余を一字一石に書写し、塚となし、その上へ仏像を石にて刻み安置し、七日間の読経を行なう。いよいよ七日目の読経も終わるころ、物凄き音とともに、炎を吹く女人、五色の雲に乗り、満足そうに上人を見つめるので、上人残してあった経石を、高く投げつけたまうと、同時に女人は昇天した。それより村は平和の里になって [た] そうである。里人大いによるこび、長く上人の徳をたたえたのである。

また当時陶村田池から西庄方面へ行く馬道があった。上人その御道中、牧野宅（現在牧野嘉太郎宅）へお宿を申しあげたところ、こころよく御承諾になられた。掘立式のこの建物も、上人がおとどまりになってからは、粗末な座敷ではあったが、夏とはいえ、一匹の蚊も出なくなったと伝えられている。

又、挿頭山^{かまし}の牛岩馬岩の間に萱屋根の小屋を造り、御教化に勤められた。それ以来旧六月十四日の夜は、いつも上人読経のお声が聞こえたそうである。なお上人のお住居には、一本の草も生えなかったとも言い伝えられている。山原好井健三氏宅の東側藪の下に上人手洗いの堀がある。又香南町大字西庄八一九番井上一郎氏の水田は昔より「熊谷屋敷」の地名があり、同所八二二の三番地の水田は「堂の前」と呼ばれている。これは、法然上人の御弟子熊谷蓮生坊の住居の跡と言い伝えられている。

あるとき、信者の中に目を病み一眼つぶれてたいへん困れる者があった。上人これをお聞きになり、不びんにおぼしめし、「我の目一つを汝に与えん。」と御自身の片方の眼を与えられた。以後上人の御尊像は片目となられたとも伝えられている。

かくのごとく上人は民の敬慕的となり、その布教は讃岐はもとより、全国にわたり、中でも仲多度郡高篠の西念寺や神野村の真福寺等は上人の遺跡である。

高篠村の生福寺は、長曾我部讃岐に乱入したとき、僧坊仏像什物等皆兵火のため灰じんになり、弥陀および善導（弥陀善導は法然上人作）円光の像だけが残った。後高松藩祖松平頼重公は、この寺を現在の仏生山町に移し、号を改めて、仏生山来迎院法然寺と称し、今日に至るまで旧高松藩主の菩提寺として、また一般民衆の永遠に信仰的となっておるのである。

かくのごとき偉大なる法然上人の徳を偲び、畑田村の庄屋井上孝賢氏は安政六年この経塚が道路より入り込み、参詣者に不便なので、塚より一部の経石を分け、道路側に石塔様



史跡法然上人御経塚跡に建立されたお御堂の内部



史跡法然上人御経塚跡



宮池西ほとり移転した経塚

式の経塚を建てた。これが宮池西ほとりの御経塚である。その後御本尊の塚に至る道路も完成した。この由縁の地に今回新たに御堂を建立し、とこしえに後世に伝える。

昭和四十二年三月七日
御堂建立記念
旧畑田村信徒一同

この「亡霊濟度」の伝承も深い意味があるであろう。その上で、このように、今尚、法然の遺徳を称え偲ぶ人が、所謂職業的僧侶階級からではなく、民間から生じていることは、注目に値する。筆者は、2011年3月20日、近兼氏に案内されてこのお堂と経塚を尋ねたが、前もっての連絡なしにも拘わらず、お堂には数人いて、像の前で瞑想されていた。懇談においても、彼らの人柄の良さが分かる。

法然去って、800年も経ても、彼の遺徳を偲ぶ人々は、法然の志—「田夫野人」教化—の結実を今に目撃することができる。その意味において、彼の伝道の意義を認めねばならない。これは、民間伝承がいかに深い宗教的意味を含んでいるかを示す。我々は、この中に蔵された真理の水をくみ出さなければならない。又、このようなジャンルを通して、真理が伝えられる可能性を追求しなければならないことを教える。それは、その源流が法然の深い宗教体験に由来す

るからである。我々は単に民間伝承であるといつてそれを軽んじてはならない。この亡霊済度の伝承の他に、重要な伝承は普通寺市蛇谷の「蛇身石」の伝承がある。今はこれらの積義には触れないが、いずれ明らかになるであろう。

このような民間伝承は、一般民衆の中に、念仏が息づくことを願った法然の遺志を継承するものである。死期の迫った法然と法蓮房との会話に次のようにある。

又法蓮房申さく、「古来の先徳、みなその遺跡あり。しかるにいま、精舎一字も建立なし。御入滅の後、いづくをもてか御遺跡とすべきや」と。上人答給はく、「あとを一廟にしむれば遺法あまねからず、予が遺跡は諸州に遍満すべし。ゆへいかむとなれば、念仏の興行は愚老一期の勸化なり。されば念仏を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし」とぞおほせられける。⁽¹⁹⁾

念仏が唱えられるとことが法然の遺跡である、と言うのである。絢爛たる高楼寺院を建立することが、彼の遺言ではなかった。此の意味において、法然の素朴で純粋な遺志が、讃岐各地に見られる伝承に生きる人々の心の中に見出される。ついでながら、法然が、子松荘にて、新たな寺院を建立しなかったことも、この彼の意思にあると考えられる。香川県において、この宗派の数が少なくとも、この信仰が生きているところ、法然が生きている、と言ってよい。

結 論

善裕昭氏は次のように言う。法然にとって、

ただどこへ行こうとも生活の中心は念仏の自行化他以外ありえなかった。実際なんらかの宗教的感化を残したことは、今でもこの地域には法然にまつわる伝承が伝わることから偲ぶことができる。⁽²⁰⁾

彼の遺訓は、これからこのような民間に尚息づく伝承を通して、ますます意義あるもへと止揚されねばならない。これらの伝承を遡上して、その源流たる法然の深い宗教体験にまで到達することが、我々に求められている。志ある者はこれに挑戦されるべし。ここから法然の宗教が香川に四国に日本に再興されるであろう、一般民間の水準から。その一例として、今、琴南町では、中寺廃寺



発掘復元が待たれる最初の真福寺の遺跡

の発掘復元に力を入れているように、最初の実福寺の発掘・復元をしてはどうだろうか。ここから、讃岐に宗教文化史のみならず、当時の我々の祖先の生活を知ることが出来、未来に残すべき遺産として価値があるのではないかと思う。

あとがき

この研究ノートを書くのに、お世話になったすべての人々にまず初めに、感謝をしたい。とりわけ、満濃町の法然研究家近兼和雄氏には、現地案内の労をとって下さり、そうでなければ到底訪問できなかった遺跡を見ることができた。そればかりではなく、参考文献を集めて下さった。又、専称寺の檀家のみなさん、西念寺の住職さん、広島の実宗学寮教授の岡本法治氏、そして、資料を提供して下さった西村英雄氏、書籍の形で、貴重な資料を残してくれた過去の方々に御礼申し上げる。

この度の現地調査において、郷土が持つ文化史を知ることができて、幸いであった。言うまでもなく、歴史は人間社会の時間的縦に連なる。しかし、我々が住んでいる社会は、地平であり、歴史は目に見えない。そこで、その目印とか書物とか遺跡の必要性があるのである。人の未来を考えると、歴史を紐解き、その教えを学ばなければならない。その上で、今回の筆者の研究ノートの為の現地訪問はそれなりの収穫を上げたと思っている。しかし、これはほんの序の口であり、本格的仕事は今後委ねられる。

〔注〕

- (1) 大橋俊雄校注『法然上人絵伝』(下巻)(岩波書店、2011年1月14日)、119頁。「法然上人行状絵図 第三十五」
- (2) 新暦については、近兼和雄「法然上人讃岐の足跡へ」『讃岐の法然上人』(浄土宗南海教区教化団・浄青会、平成19年12月8日)、34頁のよった。以下同じ。
- (3) 『法然上人御旧跡 塩飽専称寺 略記』(檀家総代 真木信夫)より。
- (4) 『法然上人 法難の遺跡 聖衆山 来迎寺』より。
- (5) 例えば、広島・実宗学寮教授・岡本法治氏。
- (6) 大橋俊雄校注『前掲書』、123—126頁。
- (7) 同、101—104頁による。
- (8) 浄土宗南海教区教化団・浄青会編『配流800年追思讃岐の法然上人』(浄土宗南海教区教務所、2007年12月8日)、38頁より転写。
- (9) 『香川県の地名』日本歴史地名体系38(平凡社、1989)、299—300頁。
- (10) 四国新聞2005年10月16日(5)「幻の中寺廃寺(琴南町)を探れ」
- (11) 望月信亨著『望月佛教大辞典』(世界聖典刊行会、昭和33年10月20日)、1639頁。その他、織田得能『佛教大辞典』(大倉書店、昭和3年3月1日)、655—56頁。中村元『佛教大辞典』(東京書籍、昭和58年5月26日)、487頁。
- (12) 『香川県の地名』(平凡社、1989) 301頁。
- (13) 近兼和雄著『円光大師法然上人一さぬき・まんのうの足跡』(編集・発行著者、満濃町教育委員会事務局内、2001年)、10頁。

- (14) 同、9頁。
- (15) 浄土宗南海教区教化団・浄青会編『前掲書』、66頁。
- (16) 『全国寺院名鑑改定第三版』（昭和48年9月1日、財団法人全日本仏教会寺院名鑑刊行会—中国・四国・九州・沖縄・海外篇—）、53頁。
- (17) 大橋俊雄校注『前掲書』、105—108頁。画図第三十三。
- (18) 同、119頁。画図第三十五。
- (19) 同、137—138頁。画図第三十七。
- (20) 善裕昭「配流の日々」『別冊太陽日本のこころ178法然宗祖法然上人八百年大遠忌記念—』（平凡社、2011）、87頁。

参考文献

- ①御堂建立記念旧畑田村信徒一同「史跡法然上人御経塚由来」、昭和四十二年三月七日
- ②壇塚総代 真木信夫「法然上人御旧跡 塩飽専称寺略記」
- ③「法然上人 法難の遺跡 来迎寺」丸亀市本島町泊
- ④大橋俊雄校注『法然上人絵伝』（上）（下）、岩波書店、2011年1月14日
- ⑤『法然上人行状画図』東光社、大正参年四月二五日。復刊 平成六年（1994年）十月一日、浄土宗正観寺発行。
- ⑥浄土宗南海教区教化団・浄青会編集『配流八〇〇年追恩 讃岐の法然上人』浄土南海教区教務所、二〇〇七年、十二月八日。
- ⑦『別冊太陽日本のこころ178法然宗祖法然上人八百年大遠忌記念—』、株式会社平凡社、2011年2月21日
- ⑧中井真孝『法然絵伝を読む』、佛教大学通信教育部、2005（平成17）年3月10日
- ⑨中井真孝『絵伝にみる法然上人の生涯』、法蔵館、2011年4月10日
- ⑩中井真孝『新訂 法然上人絵伝』、佛教大学宗教文化ミュージアム発行、2012年3月25日
- ⑪近兼和雄「圓光大師法然上人一さぬき・まんこのうの足跡」『満濃町文化財協会報第32号』、満濃町文化財保護協会、満濃町教育委員会事務局内、2001年平成13年7月。
- ⑫近兼和雄『法然上人さぬきの足跡—旧跡・伝説まつぶ』、満濃町文化財保護協会、2000年平成12年11月1日
- ⑬綾・松山史編集委員会『綾・松山史』、松山農業共同組合内、綾・松山史編集委員会、昭和六十一年六月。
- ⑭平凡社地方資料センター編集『香川県の地名—日本歴史地名体系第三八巻』、平凡社、一九八九年二月二三日
- ⑮『香川県史 2（通史編 中世）』香川県発行 四国新聞社刊、平成二年三月三十一日
- ⑯町田宗鳳『法然を語る』（上）、NHK こころの時代、二〇〇九年四月一日
- ⑰町田宗鳳『法然を語る』（下）、NHK こころの時代、二〇〇九年十月一日
- ⑱山本勇夫『高僧名著全集第十巻』、平凡社、昭和六年四月二十日
- ⑲望月信亨著『望月佛教大辞典』、世界聖典刊行会、昭和33年10月20日
- ⑳織田得能『佛教大辞典』、大倉書店、昭和三年三月一日
- ㉑中村元『佛教大辞典』、東京書籍、昭和58年5月26日
- ㉒四国新聞2005年10月16日（5）「幻の中寺廃寺（琴南町）を探れ」

（もりたに みねお 英米学科）

2012年11月6日受理